

聖書箇所：コリントの信徒への手紙一 6 章 12～20 節

- 5 章でパウロが取り上げていたように、コリントの教会では「みだらな行い」(⊕「ポルネイア」〈※「ポルノ」の語源〉)が問題になっていた。それは「異邦人の間にもないほどのみだらな行いで、ある人が父の妻をわがものに行っていること」だったが、この⊕「ポルネイア」というギリシア語は不適切な性的関係のすべてを意味する言葉とされているが、特に「売春」という意味合いが強い言葉である。コリントの町にはそのアフロディテを祭る神殿に多くの神殿娼婦たちがいて、「売春」というセックス産業でその名を轟かせていた。そしてコリントの人々の性に関する自由な感覚、雰囲気に影響を与えて、教会員にも買春を行う者がたくさんいたと思われる。
- ・そこでパウロは 12～14 節で、キリスト者の自由が性的放縦に向かうようなことがあってはならないこと、むしろ主に向かうべきことを述べる。そして 15～17 節で娼婦(⊕「ポルネー」)と交わるのではなく、主と交わるべきことを述べ、最後に「ポルネイア」は神の住まいである自分の体に対する罪であるゆえに避けるべきことを語る。

### 【注解】

- 『わたしには、すべてのことが許されている。』しかし、すべてのことが益になるわけではない。『わたしには、すべてのことが許されている。』しかし、わたしは何事にも支配されはしない。」(12 節)
- ・「わたしには、すべてのことが許されている。」
- これはおそらくコリント教会のパウロの論敵と、それに影響された信徒たちの口癖、スローガンであったと思われる。
- cf. ▶『新共同訳 新約聖書注解Ⅱ』日本基督教団出版局、1991 年、88 頁
- 彼らは、「自分たちは終末時の完成を先取りしており、完成した存在であると誇っていた」。そして「このように言いながらその自由を放縦と取り違えて世の常識を超えた熱狂主義に陥っていた」。
- ▶『新聖書注解 新約 2』いのちのことば社、1973 年、311 頁
- 「彼らは、霊的存在とされた者にとっては、からだにおいてなしたことは本質的に重要でなく、何らの影響もないゆえ、何をしても良いと主張し、放縦に陥った」。
- ※そして彼らは自分たちだけが特別な認識を持っているとして、パウロを含む他の信徒たちを見下し、高慢に陥っていたのである。
- ・パウロはそんな彼らのスローガン、すなわちキリスト者として「わたしには、すべての

ことが許されている」という事実を一応は受け入れる。しかしそれは彼らが考えるような意味では決してない。

- ・パウロにとって救いはまったく神様の恵みによるものであり、キリスト者はすべての律法のかげから解放されて真に自由にされた者であると考えていた。そしてキリスト者を再び律法のかげの下に奴隷にする試みと真っ向から徹底的に戦った。けれども、神様のこの恵みに対する応答として、その「自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい」（ガラテヤの信徒への手紙 5：13）というのがパウロの思想である（ガラテヤの信徒への手紙 2：4、5：1 をも参照）。
- ・コリントの教会の一部の人々によって放縦の口実とされていた「わたしには、すべてのことが許されている」という主張は、このパウロのキリスト者の自由についての真意を誤解したか、意識的に曲解したものと思われる。
- ・そこでパウロは「わたしには、すべてのことが許されている」と言いながらも、直ちに二つの条件を加えて彼の真意を明確にし、コリント教会の一部の人々の誤りを訂正する。まず「すべてのことが益になるわけではない」と、他者にとって益にならないことは慎むよう、そこまでいけば放縦となってしまうキリスト者の自由に制限を加える。また「わたしは何事にも支配されはしない」と、自由に見えながら実は情欲に支配されているようなことにもならないよう制限を加える。

○「食物は腹のため、腹は食物のためにあるが、神はそのいずれをも滅ぼされます。体はみだらな行いのためではなく、主のためであり、主は体のためにおられるのです。」

(13 節)

- ・「食物は腹のため、腹は食物のためにある」

→これもコリントの教会の一部の人々の主張であったと思われる。ただ単に「食物は腹のため、腹は食物のためにある」のであり、食べ物の規定によって人が救われるのではない。食べ物に関して、キリスト者の良心は自由である。これはパウロも認める場所であった。しかしコリントの教会の人々は、このように何でも食べて食欲を満足させても良いのだから、同じように娯楽と交わって性欲を満足させても良いはずだと、食欲と性欲の間に一種の類似関係を主張して放縦に陥っていたようである。これもパウロの思想の誤解、曲解に他ならなかった。

- ・神様は終わりの日、食習慣が表す古い人間の生活様式を滅ぼされる。そのことを弁え知っていたパウロは、食べ物によって仲間を躓かせないように細心の注意をも払っている（cf. コリントの信徒への手紙一 8：13）。このように食べ物に関して、キリスト者はその自由の主張で仲間を躓かせないように制限をかけるのだから、まして性欲の自由を主

張して仲間を躓かせるなど、言語道断だとパウロは言うのである。

- ・「体はみだらな行いのためではなく、主のためにあり、主は体のためにおられるのです。」  
→キリストの復活に与り栄化される「体」は「みだらな行い」のために用いられるべきではない。なぜなら「体」としての人間存在には、「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です」(ローマの信徒への手紙 12：1)という根本的な目標が与えられているからである。パウロはこの礼拝の真髓を、「体は……主のためにあり、主は体のためにおられるのです」という、主と「体」である自分自身との最も密接な関係を示す表現で語っているのだろう。この表現は、キリスト者がこの世でキリストの十字架の苦しみと死に与りつつ、やがてキリストの栄光に与るといふ、まったく主に依存する存在であることを示している。

○「神は、主を復活させ、また、その力によってわたしたちをも復活させていただきます。」

(14 節)

- ・ここでパウロは復活の事実を語る。キリスト者、教会は「神は、主を復活させ」というイエス・キリストの復活の事実に立ち、「その力によってわたしたちをも復活させてください」との確かな希望に生き、今現に働いておられる聖霊に導かれて生きる存在。それにふさわしく歩めという思いをここで込めているのだろう。
- 「あなたがたは、自分の体がキリストの体の一部だとは知らないのか。キリストの体の一部を娼婦の体の一部としてもよいのか。決してそうではない。娼婦と交わる者はその女と一つの体となる、ということを知らないのですか。『二人は一体となる』とされています。」(15～16 節)
- ・パウロのこの言葉の背後には、教会＝キリストの体という彼独自の教会論がある。詳しくはコリントの信徒への手紙一 12 章で述べられているが、教会はイエス・キリストを頭とするキリストの体であり、一人ひとりはその部分とされる。
  - ・それゆえキリスト者の「体」は自分自身のものに見えながら、実は「キリストの体」に他ならない。パウロは畳みかける調子で、性的交わりは一つ肉(=体)となるという創世記 2：24 を根拠にして、娼婦(♀「ポルネー」と交わる者はそれと一つ体となること、それゆえ売春は「キリストの体の一部を娼婦の体の一部と」することであり、それは単に個人的な罪ではなく、キリストと教会の関係という奥義を否定する重大な罪であって、そんなことは絶対に許されないと激しく拒絶する。

○「しかし、主に結びつく者は主と一つの霊となるのです。」(17 節)

- ・創世記2：24を引用して、売春により神様の恵みを無にする危険がいかに恐ろしいものかを述べたパウロは、同時に恵みに応えて「主に結びつく者」に約束されている大いなる祝福について述べる。「主に結びつく」とは、イエス・キリストが自らの死によって他でもない自分を「代価を払って買い取」ってくださった(20節)事実を信じ、自らを明け渡すことに他ならない。そのように主の体として主との密接な交わりに生かされるのは、ただただ聖霊の働きによることである。それゆえ、キリストとキリスト者の関係は一つ体となるばかりでなく、「一つの霊となる」ことに他ならない。その恵みにふさわしく応答するようというので、以下具体的な勧告が為されていく。

○「みだらな行いを避けなさい。人が犯す罪はすべて体の外にあります。しかし、みだらな行いをする者は、自分の体に対して罪を犯しているのです。知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい。」(18～20節)

- ・パウロの勧告は「みだらな行いを避けなさい」とはっきりしている。「みだらな行い」という強敵に打ち勝つ唯一の道は、そこから身を避け続けることである。そして人が通常犯す罪は「体」を損なうものでなくとも、「みだらな行い」は「自分の体に対して罪を犯すことになり、ひいてはキリストの体を損なう恐ろしいものであることを語る。
- ・キリスト者各自は彼らの中に注がれ住まわれる聖霊の宮、「聖霊が宿ってくださる神殿」なのであって、まったく神様に属するものであり、神礼拝を唯一の目的とする存在に他ならない。
- ・「あなたがたはもはや自分自身のものではない」。「あなたがたは、代価を払って買い取られたの」だと、パウロはイエス・キリストの十字架の贖いの恵みに基づくキリスト者の立場を再確認する。そしてそこから結論として、「自分の体で神の栄光を現しなさい」と積極的な命令を下す。キリスト者の自由は神と人にと仕える自由であり、キリスト者は時と場所の制約のもとにある「自分の体で」、すなわち現に生かされている歴史的な状況の中で、己の生活の全領域において神様の栄光を現すべき存在なのである。

#### 【今回の聖書箇所から思うこと】

- キリスト者の自由は決して放縦ではないということを改めて考えさせられた。イエス・キリストの十字架の贖いのゆえに、私たちがそのままで受け入れ、救ってくださる神様の恵みに応えて、自分に与えられた自由を神様の御栄光のために、また神様と人に仕えるべく用いていきたいと願う。